



「日常」の再開にあたって

夏休みが終わり、今日からまた「学校での日常」が始まります。

それについては、生徒の皆さんそれぞれにさまざまな思いがあるとは思いますが、この夏は「また『学校での日常』が始」められることがどれだけありがたいことかを考えさせられる出来事がいくつかありました。大地震や想定外の大雨による危険や生活の変化は、私たちにとっても決して他人事ではありません。災害の前では、年齢や立場は関係ありません。今日何事もなく1日が終わることは「あたりまえ」ではないことを意識するとともに、万一そうした事態になったときにどうすれば命を守れるのか、日々の生活のためにできることは何か、そういったことを「自分」を主語にして考えることが必要であると、強く感じます。

ちなみに、9月1日は関東大震災をきっかけに制定された「防災の日」です。

さて、夏休み期間中にも、様々な場面で坂中生が活躍しています。公的な行事はもちろん、地域の一員として行事に参加する姿もありました。そんな中で、ここでは8月21日に行われた「生徒会サミット」について書きます。

これは、市内全ての中学校から生徒会役員が集まり、魅力のある学校について意見を交わしたり、それぞれの学校での取組を発表したりする行事です。私も、午後からの発表に参加しました。各学校の代表生徒69名が一堂に会する様子は、なかなか迫力があります。（写真参照）

実際に参観した私が、全校で共有したいことを以下に書きます。

①本校生徒会の堂々とした発表

坂下中からは、前期生徒会から役員6名の参加でした。学校規模も校風も違う11校の集まりの中で、とても堂々とした発表でした。決して多くの練習時間を費やせたわけではなかったのですが、立ち振る舞いから声の大きさ、坂下中のよさを分かりやすく伝える内容まで、学校を代表するにふさわしいものでした。なにより、「伝える」ということにおいて、彼らの姿は手本となるものと思い、無理を言って夏休み明け集会で再現してもらいました。その姿の価値を、共有したいです。

②その活動は、坂中生の総意であるべきもの

そんな彼らが堂々と発表できたのは、前期生徒会としての確かな取組があつてこそ。そして、生徒会としての取組は、生徒会役員だけが行うのではなく、生徒一人一人が取り組んでいるからこそ、価値があるのです。他人事ではなく、自分事として学校生活を考え、役員や委員長が提案する活動に意見を出しながら、自分たちの代表を「選んだ側」の責任をもって共に取り組む。そのサイクルが、「自治」の意識と力をはぐくむこと、そしてそれは、大人になり社会の一員として生きていくうえで信頼を生む大切な力であることを、共有したいです。

③周りには多くの「ライバル」「仲間」がいること

前述しましたが、当日は市内11校がそれぞれ発表しています。どの学校も、伝統や地域とのかかわりを踏まえつつ、自分たちにとってよりよい学校について考え、取り組んでいることがよく分かりました。本当は、各校の発表も共有したいところですが…。

ここで皆さんと共有したいのは、「坂下中の外には、同じように日常を高め、また自治の力を高めるために、努力を重ねる同年代の人間がたくさんいる」ということです。日常の生活では、坂下中138人のことしかわかりません。でも、視野を広げれば、中津川市内だけでも1,867人の中学生がいます（R8年4月現在）。東濃地区に広げると、その数7,656人になります（同上）。その人数が、それぞれの学校で、日常の様々な活動を通して力を高めています。言い換えれば、皆さんは目に見えない「ライバル」と、日々切磋琢磨（せっさたくま。互いに力を高める意）していると言えるのです。

「ライバル」と聞くと、「倒さなければならない相手か!」と身構えるかもしれません。実際、坂下中を卒業したら、多くの皆さんはそんな「ライバル」としのぎを削る場面も出てくるでしょう。だからこそ、今、日常生活を通して坂下中でできることを精いっぱい行い、自分の力を高めることが大事です。そう、まずは身近な仲間とともに、です。生徒会では、今年も他校との合唱交流を企画してくれました。そんな機会を活用しながら、「ライバル」から刺激を受けるとともに、「ライバル」に刺激を与えられるような坂中生であってほしいと願います。

そして、そんな切磋琢磨ができる「ライバル」とは将来的にとってもよい「仲間」になれるであろうことも、付け加えておきます。

この先、自分を高め仲間と高め合えるチャンスとして、大きな行事がいくつか予定されています。それ以前に、自分（たち）の気持ち次第で、何気ない日常の中にチャンスはゴロゴロしています。決してうまくいかなくてもいいから、日々の生活の中から自分（たち）でチャンスをとらえ、自分（たち）なりに取組を重ねられることを願っています。

校長 清水 芳樹

